

第4回「愛猿記賞」(エッセイ部門)【佳作】

「紺帽子いつせいに」

東京都 小野 みふ

毎朝八時ごろ、近くのアパート前にとまる幼稚園バス。家からたった百メートルほどの距離でも、入園したての娘にとっては、ぬかるんだ泥道どろみちのようだったに違ちがいない。

ポケットにハンカチを入れたあと、重おもたいリュックを背負せおい、片方ずつ靴くつをはいて――。

「よし、いこう」

「……うん」

やっと外に出たところで、なかなか進まない。繋つなぐ手に、ぎゅっと力が入る。みんながバスに乗ったあと、ぽつんと突つつ立たったまま。

「いっしょに歌うたって楽たのしもうね」

先生はげに励はげまされて、娘がしぶしぶ乗り込む。

涙なみだぐんだ顔を見送るたび、胸むねが痛いたんでたまらない。後うしろ髪がみを引かれながら踵きびすを返して、溜息ためいき交まじりに玄関を開ける。脱ぬぎっ放ばなしのパジャマを拾ひろいあげて、ついぼーっとしてしまふ。

(ちゃんとスモックに着替きえたかな? 元氣よく遊あそんでいるといいな)

幾度家事の手を止め、どれほど心配しんぱいしたことか。バス停ていに迎むかえにいつでも、相変あいかわらず、もたもたして動かない。そこで早く慣なれるために、身支度みじたくの練習れんしゅうに励はげんだ。もつとゆとりを持もてるよう、共ともに早寝早起はやねはやおきを心がけた。

「ママ、あのね、今日きょうね……」

娘が歩きながら、ぽつぽつ語り始めたのは、夏休なつやすみが明けてしばらくしたころ。なかよし

の友達ができるにつれて笑顔が増えて、バス停までの行き来もスムーズになっていった。みんなから遅れてうつむき加減に降りていたのが嘘のように、紺色の帽子がぼんぼんと飛び跳ねる。さよならの挨拶をしたあと、いっせいにママやパパの元に駆け寄る。

「みてみて、おり紙やったんだ」

娘が得意げに手提げ袋を開いてみせる。ぱっと覗けば、色とりどりの動物がいっぱいだ。

「とってもぎやかだね。どれも上手よ」

「ママにはいつ、ぞうさんあげる！」

「まあ、ありがとう」

「ねえ、しってる？ ぞうさんのながーいお鼻はね……」

ゆかいなおしゃべりが、弾む、弾む。誇らしげな笑顔が、キラキラ眩しい。朗らかな声を響かせながら、あつという間に家に到着だ。

穏やかな小春びよりの朝。

「ママ、はやくうー。バス来ちゃうよー」

娘がさっと靴をはいて、大きく手招きする。

あわててブーツに足をつっこんで、もすもす後を追いかける。

「あつ、来た」

娘が少し丈の短くなったスカートを揺らしながら、一番乗りだ。すっかり慣れて、お姉さんらしくなってきた。

「バイバイ」

元気いっぱいの子どもたちをのせて、赤いバスがゆっくり発車はっしゃしていく。角かどを曲まがって見  
えなくなったところで、そっと手おを下ろす。もう何も心配しんぱいすることはない。

さあ、新しい一日いちにちの始まりだ。